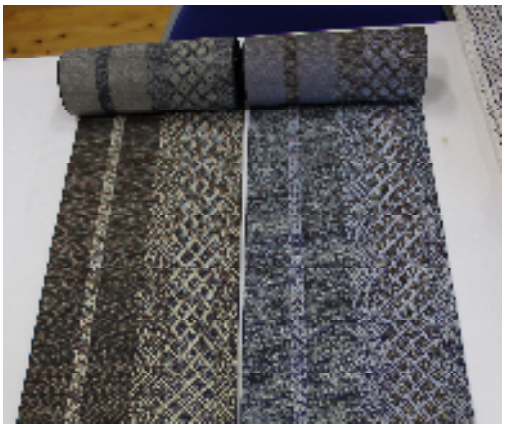
全国シルクのまち情報誌

知8・る・く

平成２３年６月

No.2 夏 号



シルクのまちづくり市区町村協議会

情報誌の名称の『知・る・く』は、「シルク」の事を「知る」、「シルク」の街を「歩く」という意味が込められており、３つのフレーズを融合させた造語です。
「知」の「口」部分は絹糸をイメージ。同時にシルクの無限大（∞）の可能性も表現しています。「く」の下部には靴をあしらい、街を歩くイメージと協議会の前進の意味を込めました（足利市商工振興課の杉戸さんによる発案・命名です）。

No.2 春号＞＞＞Ｃｏｎｔｅｎｔｓ

●協議会顧問のご紹介／【特集】顧問に聞く！

（１）顧問の紹介 …… 1

（２）質問の回答 …… 2

●会員自治体の情報（シルクに関わるイベントや取り組みなど）

（１）茨城県結城市 …… 13

（２）群馬県富岡市 …… 15

（３）長野県岡谷市 …… 16

（４）京都府京丹後市 …… 18

（５）愛媛県西予市 …… 19

（６）鹿児島県鹿児島市 …… 20

《参考資料》

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成員一覧 …… 21

協議会顧問のご紹介

顧問に聞く！

シルクのまちづくり市区町村協議会では、シルク産業やシルク文化に関わる学識経験者の方を顧問として任命し、協議会活動への助言および協力をいただくこととしています。

今回は、顧問にご就任いただいた方の中から、コーディネーターとデザイナーの方々をご紹介いたします。

①クリエーションコーディネーター	**岡田（おかだ） 茂樹（しげき） 氏**
②クリエーションコーディネーター	**松田（まつだ） 正夫（まさお） 氏**
③テキスタイルデザイナー	**酒井（さかい） 美和子（みわこ） 氏**
④テキスタイルデザイナー	**須藤（すどう） 玲子（れいこ） 氏**
⑤テキスタイルデザイナー	**永森（ながもり） 達昌（たつまさ） 氏**
⑥テキスタイルデザイナー	**福井（ふくい） 健二（けんじ） 氏**

現在、ファッション、テキスタイルの分野で活躍されている顧問の皆さんに、シルクに対する考えや今後の展望などについて伺いました。

――「シルク」という素材のイメージについて、どのように捉えられていますか？

酒井　エレガントな光沢と絶対的な風合いに対する信頼感がありますが、やはりきものの イメージが強いです。それとイブニングドレスなど。日常着としてのイメージはあまりないです。

　また、「絹」というと日本のきものが真っ先に浮かびますが、「シルク」というととてもエキゾチックで、中国や中近東、シルクロードの先にあるヨーロッパの中世のイメージが浮かびます。

福井　世間一般と同じように、エレガントでフォーマルな感覚を持つ高級素材というイメージですが、その一方で取り扱いが難しく、手入れに手間ひまがかかるために、日常着としての着用には二の足を踏むことがあります。

　ドレスアップという言葉が死語になりつつある現代、身近な素材としてのアピールと様々な機能付加を含めたテキスタイル開発が必要であると考えます。

松田　「シルク」といえば高級なもの、贅沢なものというイメージと肌さわりがよく光沢（艶）のある素材という面があります。一方高価なものという印象と、取り扱いが難しいというマイナス面も同時に思い浮かべます。しかし、日本人にとってはあこがれの素材であり、生活文化面では「きもの」に代表されるように極めて身近なものです。シルクのこれからという点では、高価で取り扱いが難しいというマイナス面を改善する余地は大いにあると考えられます。

岡田　人類最古の動物性繊維。滅び行く運命ですが、人類の英知の歴史の承認として未来にぜひ残したい素材だと思っています。

日本ファッションプロダクト協会　代表理事

岡田（おかだ）　茂樹（しげき）　氏（クリエーションコーディネーター）

【プロフィール】
　ジュンコシマダ JAPAN 代表取締役・会長。ジャパンファッションウイーク(JFW)東京コレクション担当実行委員。中小企業基盤整備機構のアドバイザーなどを歴任。
　[現在]日本ファッションプロダクト協会代表理事。鶴岡織物工業協同組合 KIBISO プロジェクトプロデューサー。鶴岡シルク㈱顧問。

須藤　シルクについては、一般的には「洗濯できず・高価」というイメージで捉えられていると思います。

　ユニクロの「ヒートテック」が、ポリエステルの本来持っている機能を積極的にアピールし大成功を納めました。

　シルクは、ヒートテック（ポリエステル）を上回る機能、例えば保湿性、保温性、紫外線吸収など、すばらしい機能を持っています。そのことが一般にはあまり知られていないことが残念です。

永森　シルクの糸や織物が醸し出す「しなやかさ」、「上品な光沢」、「極め細やかさ」等は、日本人そのものの素晴らしさに通じ、日本文化を織り成す根源にも思われます。

――日本のシルクについては、どのように捉えられていますか？展望についてお聞かせください。

岡田　残念ですが「滅び行く運命」と認識しています。ただ、養蚕業とそれに付帯する高度な加工技術とは別個に考えるべきと思います。農水省主管の「養蚕」と経産省主管の製糸から最終製品らいたる「加工技術」とは別で、後者の高度な技術は未来も保持されてゆくべきと考えます。

酒井　日本のシルクといえばきものというイメージが真っ先に浮かびますが、私は団塊の世代ですが既にきものとは無縁の世代で、自分が結婚する前に母がそろえてくれたきものは湿気もとらぬまま既に 30 数年しまい込まれて、どうしたものかといつも気になっています。

　同年代の友人にも同じような人がたくさんいて、ごく少数のきもの好きを除けば、団塊の世代にとって「きものは絶対に着ない」とまでは言い切れませんが、多分着ることはないと思われます。しかし、家にはそこそこの高価な在庫があるというつらいイメージです。

　面白いことに 30 代前半の私の娘がきもの好きで、私や祖母のきものばかりでなく、古着まで自分流に楽しんでいます。きもののルールからいえば、びっくりするような組み合わせも平気でするので、見ていてハラハラしますが、ルールに縛られてきものを難しいものと考える私以上の年代と違い、そういうルールから解き放たれた自由で楽しげなきものスタイルを見ると、案外こういうマーケットにも未来はあるのではと思えます。

　きもの以外で、日本のシルクが使われている洋服や雑貨を、そうでないものとあえて区別して考えることは少ないです。仕事柄シンプルでベーシックな服を見ることが多く、素材にはこだわって服を選ぶので、シルクもたくさん持っていますが、日本のシルクという表示の製品は買ったことがありません。

　アパレルで長い間デザイナーとして働いていたのでシルク製品も扱ってきましたが、その時も一般的な婦人服でしたから、シルク素材を選ぶときに国産シルクというのはコストで選択の余地がありませんでした。付加価値の高い特殊な和風の商品のための素材という認識でした。

　日本のシルクの加工技術や製品の品質には信頼感があるので、一般の消費者にとって日本製という表示はある程度の品質保証のイメージはありますが、最近は目が肥えて

きているので、商品そのものの価値をよく判断して原産国にはこだわらない消費者が増えてきています。

そういう中で、日本のシルクという表示が商品の価値の差別化ではなく、単に価格が高い理由だけになってしまっていたら、消費者に注目してもらうのは難しいでしょう。

私は、日本のシルクというのは日本のすぐれた加工技術によって作られたシルクという見方なので、明快に海外での廉価版のシルク製品とは一線を画した見え方であってほしいと思います。それには生産技術はもちろんですが、売る環境や売る人の知識なども大切だと思っています。

福井　他の国産品同様に輸入品よりも高品質と思っている消費者が多いようですが、実はその品質さえも中国やブラジルからの輸入品（生糸等）に劣っている現状があるのも事実で残念に思います。

価格・品質で敵わない以上は、特殊な繭・糸で勝負する以外に道はないと思います。

高付加価値シルクへの資源の集中が必要であり、そういったものの開発に対し、バラまきではない助成のあり方を真剣に考える必要があると思います。

松田　純国産生糸という面では、供給源である養蚕農家の極端な減少により、養蚕産業としては消滅の危機にあります。海外生産生糸に頼らざるを得ないのが現状です。

一方、日本は世界の生糸の20％弱を消化している一大消費国です。このうち三分の二は「きもの」分野ですが、日本人のシルク好きが伺われます。

㈱大阪繊維リソースセンター　代表取締役社長

松田（まつだ）　正夫（まさお）　氏（クリエーションコーディネーター）

【プロフィール】

1958 年神戸商大（のちの神戸大学）卒。伊藤忠商事㈱入社（主に婦人分野の素材、製品担当）、1973 年婦人衣料部婦人衣料製品課長。1975 年伊藤忠アパレル㈱出向、婦人衣料部長。1981 年伊藤忠ファッションシステム㈱出向、第一企画部長（ブランド提携、トレンド予測、企画マーケティング、地域開発調査、分析等担当）、1984 年取締役東京支店長、1990 年取締役テキスタイル本部長。1993 年㈱大阪繊維リソースセンター出向、取締役、1997 年代表取締役常務、2002 年顧問、2005 年退任。2007～2010 年㈱中小企業基盤整備機構近畿支部地域資源プロジェクトマネージャー。2010 年㈱大阪繊維リソースセンター代表取締役社長。

1988 年大阪府繊維産業活性化委員会専門委員にはじまり、2008 年～純国産絹審査委員（日本絹業協会、農水省）、2009 年～ジャパンベストニットセレクション審査委員長（JBKS 実行委員会、経産省）など数々の公職を歴任。

世界最大の生糸消費国として、シルクの今後の日本でのあり方を真剣に考えるチャンスでもあります。

底を打ったかにみえる「きもの」需要ですが、複雑な流通経路の短絡化と悪しき商習慣の是正によって合理的価格の実現、最終市場を見据えたものづくりと「きもの」を着る機会の創出を業界あげて取り組めば、悲観的になる必要はないと考えます。

「きもの」以外のシルク消費の三分の一を占める分野で、日本のシルク加工技術を活かした日本ならではの商品を内需のみでなく海外に向けて発信することにより、シルク産業の振興を図る道も重要です。

須藤　農作物と同様、日本のシルクには日本の良さがあります。日本のシルクの良さを、アジア各国へ紹介してはどうでしょうか？

永森　シルクを育んできた様々な生活・文化・産業のアーカイブと、現代の接点を考察し、将来に活かすことが重要だと考えます。

――シルクの可能性について、デザイナーとしてのご自身のお考えをお聞かせください。

永森　必要十分条件は枚挙にいとまがないですが、先進国型生活文化産業の柱として十分、「材」押して考えられると思います。

福井　ファッション製品（ガーメント）としてのシルク素材の広がりは、ますます顕著になるカジュアル志向の中で今後も期待は出来ないでしょう。これからもガーメントの流れは着易くて取り扱いの楽な方向であり、晴れの場でのウエアリングにしか活路は無いと考えます。

しかし、その一方で身体（肌）に近い所、インナーウエアや生活密着型の寝装インテリア分野ではシルク素材の魅力をアピール出来る部分が多々あるので、ウオッシャブル加工の普及（加工賃を安く！）によって洗濯性の向上を図りながら、これらの分野への積極的なアプローチを行うべきだと考えます。イージーケア性の向上は究極の課題です。

酒井　純粋に繊維の材料としてのシルクには、まだまだ大きな可能性があると信じています。

ひとつは、唯一の動物性のフィラメント繊維であること。生き物が作る繊維の持っている不思議なパワーが、まだ100％解明されているわけではないからです。現代の科学の数値で表せる範囲を遥かに超えた何か不思議な力がシルクにはあると思います。そして、生命科学の発達は、きっと今では考えられないような新種の蚕を生み出し、その新しい蚕が日本のシルクのコスト問題を解決してくれると思います。更にそのことは、繊維原料への貢献のみならず、医療分野など今とは違った方向への可能性が大きいのではと考えています。

食品や化粧品の分野には、もうかなり使われているようですが、もっと健康への効能などが科学的に証明されるようになると、繊維では考えられないような高価格も可能かも知れません。繊維のままでなくても、人工繊維に新しい方法でドッキングしたハイブリッド繊維などもいずれ開発されるでしょう。人工繊維の性質を兼ね備えたシルクが、繭１粒

から何キロも作り出せるようになるかもしれません。夢を見る人がいる限り、夢の実現は可能だと信じたいです。

須藤　2007 年より、鶴岡で出会った「きびそ（蚕が最初に吐き出す糸）」を使った織物のデザインをしています。「きびそ」は軽く、荒削り、張りのある風合いを持っていますが、布地もユニークな仕上がりとなっています。鶴岡では、製糸工場が稼働しているので、きび

(有)ＧＢカンパニー代表取締役

酒井（さかい）　美和子（みわこ）　氏（テキスタイルデザイナー）

【プロフィール】
1964 年兵庫県立姫路短期大学・生活科学学科卒。同年オールスタイル入社・ニットデザイナーとして勤務。1972～1984 年三宅一生のパリコレクションでニット部門の素材開発、技術開発を担当、イセイミヤケ事業部長を兼任。1983～1992 年フランス・ドロテビス社ブランド・ドロテビス事業部長。2003 年コンサルティング会社(有)ＧＢカンパニーを設立。
2003 年～国内外企業のデザイン・企画顧問、経産省等のプロジェクトアドバイザーを歴任。

【シルク製品のご紹介】

2011 年ジャパンシルクの価値創造展のために開発した鶴岡のキビソとブラウンカシミヤの混紡糸（50%・50%の 30 番双糸）による米織りのストール（経糸オーガニックコットン）と同じ糸で編んだ 12G のホールガーメントのニット。キビソのコンダミの問題が解決できなかったので、染めずに使えるようブラウンカシミヤをミックスしました。カシミヤのふくらみとシルクの光沢がとても自然で風合いのよい製品になりました。

アイテム：ガウン
素　　材：カシミヤ/絹（Kibiso）x
　　オーガニックコットン
ディテール：１２Ｇニット
　　ラーベン柄
原料開発：東洋紡糸工業
製品製造：畠山メリヤス
デザイン：ＧＢカンパニー

そ、褚糸などの副産物ができます。それらを有効に使うことができるので、新たな可能性が生まれているのだと思います。

――シルクは今後どのように活用するのが良いと思われますか？

永森　先進国型生活文化産業面での活用を分析すればよいと考えます。

岡田　ほかの繊維との組み合わせによる新しい風合い・新しい感覚の繊維を誕生させることが必要です。特にシルクの持つ人類に与える「効用」を最大限に生かす「新混合繊維」の開発が望まれます。

福井　「肌に良い！」。この一言ほど、女性を振り向かせることが出来る魅力的な言葉はありません。軽い・滑らか・上品な光沢・しなやかなドレープ性 etc.。シルクの魅力を形容する言葉はたくさんありますが、この「肌に優しい・肌に良い！」が究極の売り文句なので、それに1点集中しての商品開発を目指すのも方策だと考えます。

酒井　エレガントで高級な繊維の原料というシルクの使い道は変わらず残ると思います。中国、インドやそのほかの低開発国の経済発展につれて高額所得者が生まれることで世界的には消費量が落ちることはないのではと思います。加工技術がより発展すれば洗濯性の問題はなくなり、バイオ科学の進歩は今の労働集約型の養蚕をロボットと人工飼料での省エネ生産を可能にするかもしれません。生産量が増えることでコストが下がり、従来は希少価値だけで販売量の少なさがますます価格を押し上げていたジャンルの商品が身近になってゆく可能性もあると思います。日本のシルクは 20 世紀初頭では世界一の生産を誇っていたそうです。

その日本人が、シルクについてあまりにも知らなすぎると思います。高校までの教育の中で、シルクについて学ぶのは家庭科と理科であわせても数十行ではないでしょうか？こんなに大切な自国の産業について教育の中で知識が与えられなかったというのは、米も同じことですが現在のシルク離れ、米離れの一因になっていると思います。

これからのシルクのマーケットを支えるのは、商品開発ももちろんですが、シルクの 正しい知識とその素晴らしさを消費者に正しく伝えてゆくこともあわせて大切だと思います。

わかっている範囲でも、シルクの寝具はこれからの高齢化社会で富裕階層の消費に期待が大きな分野だと思います。着る楽しみよりも機能的な日々を安全に快適に過ごすことのウエイトが大きくなってゆく後期高齢者や病人にとって、ぜいたく品ではない必需品としてもシルクの寝具の開発が急務です。そのためには家庭でも病院でも従来の洗濯方法に耐えられる品質のシルクが必要です。

洞爺湖サミットでは来日した各国の首脳のために、シルクのベッド周りの製品が京都府の丹後産地で生産されたそうです。当然、ほかの綿のシーツと一緒に熱湯で漂白しながら洗える製品ではありません。一回限りでその後どうなったか興味のあるところですが、世界マーケットを目標にすれば、洗濯できない一回限りのシルクのシーツでさえ製品化の可能性があるということです。

自分のこと、今の沈滞した日本経済のことを考えると、生活とかけ離れた高額な製品はなかなか開発にも慎重になってしまいますが、創意無限です。

力のある若い方々が、この局面を切り開いてくれることを切望してやみません。

須藤　セリシンの持つ機能、特に紫外線吸収機能を生かした製品づくりに期待をしています。セリシンを多素材にコーティングし、日傘、日よけ帽子、アウターの素材開発、および、アミノ酸の保湿効果機能をアピールした高年齢者のための寝具など。

シルクには、高付加価値の製品づくりの可能性があると思います。

㈱布　取締役

須藤（すどう）　玲子（れいこ）　氏（テキスタイルデザイナー）

【プロフィール】

1953 年茨城県生まれ。武蔵野美術短期大学専攻科修了。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科テキスタイル研究室助手を経て、1984 年株式会社「布」の設立に参加。現在取締役デザインディレクター。2002 年「NUNO WORKS」ブランドを立ち上げる。

1994 年ロスコー賞、1999 年 JID 部門賞受賞、2007 年毎日デザイン賞ほか受賞。1988～2006 年まで武蔵野美術大学非常勤講師。2007 年より東京造形大学教授。2005 年英国 UCA 芸術大学より名誉修士号授与。

1997～1999 年「NUNO NUNO BOOKS」全６巻発行。1999 年ニューヨーク近代美術館「Structure and Surface 展」に出品。2001 年「須藤玲子の布・技と術展」（京都芸術センター）、その後国内外を巡回。2005 年「2121 the textile vision of Reiko Sudo and NUNO 展」（James Hockey Gallery）、その後ヨーロッパ各国を巡回。2008 年 The John F. Kennedy Center for the Performing Arts「JAPAN! CULTURE + HYPERCULTURE 展」に出品、その他国内外の数多くの展覧会に出品。

作品はニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、クーパー・ヒューイット美術館、ビクトリア＆アルバート美術館、東京国立近代美術館工芸館他に永久保存されている。

【シルク製品のご紹介】鶴岡シルク「きびそ」を使った製品になります。

▲きびその二重織り（風通）

Photo by Sue McNab

▲きびそ窓

Photo by Sue McNab

松田　日本固有の文化でもある「きもの」の新しい時代に合った発展は言うまでもないですが、物性的にも優れたシルクの特徴を活かした開発が求められます。

シルクの特徴（肌さわりのよさ、優れた吸水性と染色性、光沢、UV カット等の機能性）を活かして、100％に拘らない交織、交編などシルク混素材の開発による価格の合理化、ウオッシャブルへの挑戦など消費者に馴染みやすい商品化によるシルク需要の創出を期待しています。

西陣織、友禅染め、縮緬等、長年にわたり発展してきた加工技術を活かし、洋（衣、身の回り品、インテリア）の分野での日本ならではのシルク商品を世界に向けて発信し、「贅沢な素材」から日常的に「親しめる素材」へと浸透させたいと考えます。

――国内のシルク産地の現状をどのように捉えられていますか？

酒井　繭代補填制度がなくなった後の純国産繭とそれから作られる『純』国産シルクの未来については、現状の維持は非常に難しいのではと思っています。

どの角度から見ても、このように長く官の保護の対象になって支えられた産業がほんの数年という期間で丸裸で放り出されるような過酷な状況はあまり例がありません。もし未来の発展があるとしたら、それはきっと今までの消費者が持っている絹のイメージがひっくり返るような、新しいジャンルの商品にならざるを得ないと思います。海外から入ってくる商品と同じようなものを作っても、あまりにもコストの高い日本のシルクは　国際競争力のある商品にはなり得ないと思います。

世界に誇れるシルク産業の知識と技術がある日本がコスト競争だけの問題で敗退してゆくというのはあまりにも残念です。

国内だけに市場を求めず、海外の富裕層に向けて妥協のない高品質のシルク製品の提供がより身近な目標と思いますが、そのためには長い伝統の技と若いデザインの力のコラボレーションが何より大切だと思います。

短期的な取り組みではなく、これぞと見込んだ有能なデザイナーと時間をかけた取り組みが可能になればと願います。

永森　生産現場を中心にした産地及び企業に目が向きがちですが、もっと消費者ニーズを考慮した上で、それを正確に掌握し、企業・地域・産業としてのヴィジョンを優先すべきではないでしょうか？

福井　繭を生産する産地・糸を作る（製糸）産地等の原料供給産地と、シルク織物・編物を生産するテキスタイル産地では事情が異なると思われますが、高付加価値シルクの開発を行う場合、ひとつのブランドを確立するために垂直型のプロジェクトが重要で有効な手段と思われます。特に養蚕農家に対しては、高付加価値品種への積極的な取り組みを推奨し、併せて高度な製糸技術を加えることで、より差別化出来る糸を作り出すことが重要であると考えます。

一方、テキスタイル産地としては、複合素材の開発にも積極的に取り組むことが大事で、産地に広がりを持たせることは幅広いテキスタイル開発に繋がると思われます。その場合、シルクに必要な前工程・後工程の課題があって、シルクに馴染みの無い産地に

対するサポートを業界全体で構築することも重要なポイントになります。

松田　国産繭を原料とするシルク商品づくりについて、三桁まで縮小した養蚕農家を活用しての製品化には限界があります。ただし、産業ベースには程遠いですが、品種改良等による特徴ある希少品として、また優れた技術を駆使して高級な手づくり的商品として生き残る道はあると考えます。

遅きに失した養蚕農家を食品と同じ農業分野の範疇として捉えるのではなく、ファッション産業の担い手のひとつとして考えるべきであったと思います。

とはいえ日本のシルク産地に共通して言えるのは、長年にわたり和装関連を中心として築き上げた素晴らしい技術が残されていることです。これらの技術は、これまで大いに各地のシルクに馴染みのない繊維産地にも役立って付加価値商品の発展に貢献して

オフィス・ナガモリ代表

永森（ながもり）　達昌（たつまさ）　氏（テキスタイルデザイナー）

【プロフィール】

1963 年亜細亜大学商学部卒。同年武田染織株式会社入社。1998 年セルマー株式会社（元武田染織株式会社）社長就任。2001 年オフィス＊ナガモリ設立。

［現在］JFW-JC 産産・産学・学学コラボ委員、ACT21 展（墨田ニット有志）、中小企業自立支援プロデューサー（産地企業支援）、シルク価値創造ジャパンビジョン具現化検討委員会（日本繊維輸入組合）委員、ベストニットセレクション審査員を歴任しイベントをプロデュース。武蔵野美術大学、多摩美術大学、青山学院大学、杉野服飾大学、東京・大阪・名古屋モード学園、エスモードジャポン、IFI 等の特別講師（テキスタイル中心）を務める。また、テキスタイルにおける流通・ニュービジネスモデル、商品企画・開発等をテーマに、尾州、丹後、桐生、今治、米沢、北陸、浜松等の産地で公演を開催。

【シルク製品のご紹介】ショールや和にとらわれずモダンな雑貨に再生したもの

います。一方、シルク産地に限った話ではありませんが、産地の技術者の高齢化と後継者問題が提起されています。

各シルク産地では、シルクにまつわる展示館などの整備、新設が見られます。文化財として懐かしむだけでなく「きもの」を中心としたシルク製品の見直し、普及のための催事などが熱心に行われています。シルクファンの増えることと、新しい需要が喚起されることを期待しています。

――今後の協議会活動の方向性や具体的な取り組み等について、ご意見・ご提案がありましたらお聞かせください。

岡田　私は現在「鶴岡織物工業協同組合」の依頼でシルクならびに「KIBISO（蚕が最初に吐き出す糸）」に関する総合プロデュースをお引き受けしていますが、それぞれの地域の養蚕・その後の加工についての取り組みにかなりの温度差を感じています。

協議会として「全体的な取り組み」についての方針確立と、そのために積極的な取り組み、各産地・組合の情報の共有化、勉強会実施が不可欠です。

鶴岡では 3 年間の公的支援が終わり、組合の全面的な始動により「鶴岡シルク㈱」が設立され、ビジネス展開が急ピッチに進んでいます。

永森　確かな組織、役割分担、企画内容等、今現在も十分伝わりきれていないので、もう一度その辺りのことをしっかりさせた上で協議会の活動を進めていただきたいと思います。

福井　新しい取り組みに賛同し、新素材・新商品の開発に積極的なメンバーで総合展へのブース出展等を目指してはどうでしょう？これは共通の目的意識を持つために必要なことだと思います。ただし、「烏合の衆」にならないように、また「船頭多くして船山に登る」ことのないように注意が必要です。最終目的に向って商品ラインが一致するメンバーに絞り込まなければ、魅力的なものは出来ないと思います。結果として助成金を得てそのような機会を持つことが出来ると思われますが、初めから他人の財布を充てにしたものでは、従来からの助成金事業の域を脱しません。助成金事業というものは一種の麻薬だと言いった認識を持って、あくまで自助努力で頑張る気構えが大切でしょう。

松田　協議会の組織として「きもの」と「きもの以外」の振興の部会を立ち上げ、それぞれの情報交換、新しい取り組み等を検討し、一方で両部会の連絡会を持ち、シルク産業振興のための相乗効果を検討されてはどうでしょう？

また、各産地の持つ技術を活用し合い、商品づくりの連携を図ることも必要です。これによって新しい特徴をもつ商品が開発されますので。

加えて、異産地の交流会なども大いに進められてはどうでしょう？前に述べましたが、国内産繭の産地振興も農業対策として捉えるのではなく、ファッション産業の一環として純国産絹製品づくりのための対策として考えていかなければなりません。

本協議会の役割としては、シルク商品づくりの推進と同時に、シルクの国内外に向けた PR 活動があります。身近な商品として需要者に親しんでいただくための「シルクの日」の設定によって、小売り段階も巻き込んだ行事が出来ないものかと考えています。

また「日本のシルク展」など日本の優れたシルク加工技術を活用し、国内のみならず海外に向けての発信も考えていくべきです。

K.FUKUI PERSONAL OFFICE&EA 主宰

福井（ふくい）　健二（けんじ）　氏（テキスタイルデザイナー）

【プロフィール】
1970 年インターナショナルデザイン研究所専攻科修了後、大日本印刷（株）入社。その後、婦人服地コンバーターに転職後の公的活動として「イデア京都」コンセプト部会長・ファッショントレンド委員長等を歴任。1988 年 K.FUKUI PERSONAL OFFICE を設立し独立。主な仕事として合繊メーカー「帝人」マーケテイング部顧問、京都芸術短期大学および京都造形芸術大学非常勤講師、京都スコープ素材開発委員会 ZERO チーフスタイリスト、KYOTO BREATH 企画ディレクター、KPA 展企画コーデイネーターを歴任。そのほか産地への企画指導と展示会コーディネート、リソースセンター等における人材育成事業の講師や若手人材育成への取り組みに尽力。1992 年神戸六甲アイランドに FLAG SHOP&GALLERY EA 設立。

【シルク製品のご紹介】これまでに企画･開発に携わったシルク関連製品

【金糸刺繍クッション】↑
無撚シルクを使ったベルベット
１１２㎝×５５ｍ
グランド：キュプラ１００％
パ イ ル：無撚シルク（エコ版）

【ワンピース】→
シルク１００％素材によるセリシン
定着捺染１１２㎝×５０ｍ

今回は、顧問にご就任いただいた方の中から、コーディネーターとデザイナーの方々をご紹介しました。
次号では、ファッションジャーナリスト、着物伝承家ならびに着物・帯文化研究家の方々をご紹介いたします。

結城紬 ユネスコ無形文化遺産登録

世界が認めた伝統文化と技術

平成22年11月16日，「結城紬」がユネスコ無形文化遺産保護条約に基づき，「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載されました。茨城県結城市を中心に古代より育まれ，先人達から織り継がれてきた結城紬の伝統文化や技術のすばらしさ，さらには，他の地方や国々では見られない独自性・特色などが世界的に認められたことになります。ここでは，その成り立ちと関連情報を紹介したいと思います。

結城紬の歴史

結城市の東を流れる鬼怒川流域は桑の生育に適し，遠く古代から養蚕が盛んで，その副産物として絁(あしぎぬ)が織られました。その後，結城氏が北関東で勢力を伸ばした室町時代には「常陸紬」と呼ばれ，鎌倉管領にも献上されました。

全国的に「結城紬」の名が知られるようになったのは，江戸時代にこの地を治めた幕府の代官・伊那備前の守忠次が，結城紬の振興・改良に努めたためとされ，『和漢三才図会』に最上品の紬として紹介されています。

近代以降，外国製の機械織りが主流となるにつれ，手作業の地機織りが廃れゆくなか，絣織りによる模様を開発して時代を切り抜け，「亀甲」に代表されるような緻密な技術で織り上げられる現在の結城紬へと受け継がれたのです。

伝統技術

結城紬の制作には，多くの時間と労力を要し，手作業による20以上もの工程を経ることでやっと一つの織物が完成します。

そのうち「手つむぎ」，「絣くくり」，「地機織り」という3つの工程が，昭和31年に国の重要無形文化財の指定を受けた際の指定要件とされました。さらに，昭和52年には「伝統的工芸品」にも指定されています。

手つむぎ

結城紬の糸は世界にも類を見ない無撚糸。「つくし」という道具に真綿を絡ませ，撚りをかけず，手でひねりながら糸を引き出してゆく。

絣くくり

絣柄となる部分に染料が染み込まないよう，綿糸でしばる作業。200亀甲の場合，400箇所もしばる。一般的に3ヶ月ほどの時間を要す。

地機織り

地機は最も原始的な織機の一つ。経糸を腰当に結び付け，腰の力で張り具合を調整しながら，樫材でできた杼で横糸を打ち込む。

ユネスコ登録を記念して

結城市商工観光課では，結城紬の魅力をＰＲするための事業として，「本場結城紬きもの貸出事業」を行っています。

今年１月，結城市では，今回の登録を記念するとともに，より多くの皆さんに結城紬を知っていただくため，「結城紬で新春さわやか案内」を実施しました。正月仕事始めの４日間，結城紬を着た職員が，来庁した市民を出迎え，窓口まで案内するというものです。

また，同事業を活用し，３月に開会した結城市議会定例会では，市長，議長をはじめ，出席した議員全員が結城紬を身にまとって議場に上がりました。

これらは結城市でも初の試みでしたが，市民からも良い評判を得るとともに，マスコミにも取り上げられ，市内外に結城紬を周知することができました。

結城紬を着た職員らがロビーで市民を迎える

結城紬で身をひきしめ議会に臨む議員

ふれる、感じる　伝統的工芸品展が開催されました

1月28日から30日にかけて，東京ミッドタウンにおいて，茨城県の国指定伝統的工芸品である「結城紬」，「笠間焼」，「真壁石燈籠」の展示・販売会が開催されました。

会場では，それぞれの産地の技術者による実演やセミナーが行われ，また，訪れた人たちが体験できるコーナーも好評で，連日にぎわいを見せました。

このイベントでは，各産地の素材を活かした著名デザイナーとのコラボレーションによる作品も展示・販売され，結城紬の魅力を多くの来場者に感じていただけました。

東京ミッドタウン　ガレリア内アトリウムの様子

結城紬は，袖を通すごとに味わいが深まり，親から子へ，子から孫へ，「親子三代」に渡り受け継ぐことのできる，世界に誇る着物文化です。

【問い合わせ先】　結城市商工観光課　℡：0296-34-0421

産地の取り組み紹介

（2011.4 月発売予定の
Tomioka Silk ネクタイ）

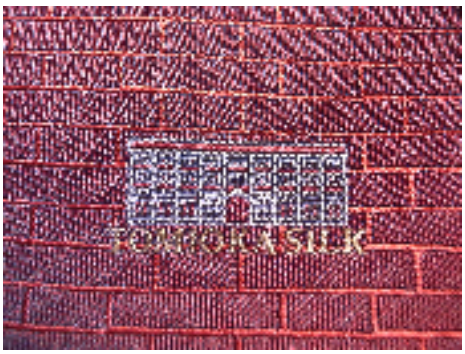
富岡シルクブランド協議会のオリジナル商品に仲間が加わりました。

生産履歴が確立された富岡産で、しかもまだ世の中に流通していない細織度品種（愛称：富岡小町 Ｎ７NONF×二、Ｎ７NONF×二・一）の生糸を 100％使用し、成和株式会社との共同製作により、Tomioka Silk ネクタイが誕生しました。ネクタイ製作・販売における歴史と伝統を有する成和株式会社は、自社で「機資料館」を開設し、木製ジャカード織機をはじめとする貴重な民俗資料を保管しており、絹文化・織物文化を大切に継承していこうという精神が感じられます。

もちろん、染色、製織、縫製等、徹底した純国産のものづくりにこだわりました。

今回は、オーソドックスながらも洗練されたデザインのストライプと、富岡製糸場のレンガをモチーフとしたパターンの２種類を商品化しました。いずれのパターンにも富岡シルクブランド協議会のロゴマークが入り、シンプルながらも味わい深く、存在感を醸し出しております。

富岡市養蚕農家における「養蚕技術」と成和株式会社の「ものづくり」とのコラボレーションにより、誕生した究極のオリジナル製品です。かつて高品質な生糸を海外に輸出をしていた富岡製糸場におけるものづくりの精神をお伝えし、養蚕農家が継続して養蚕に取り組むことができる様、また、世界遺産登録の追い風になるような商品づくりにこれからも励んでいきたいと思います。



（富岡シルクブランド協議会のロゴマーク）

富岡市教育委員会世界遺産推進課　℡：０２７４－６４－０００５

2011シルクフェアinおかや

主催：シルクフェア実行委員会
共催：(独)農業生物資源研究所
協賛：(社)岡谷工業高等学校同窓会

(左上)市立岡谷蚕糸博物館：フランス式繰糸機の実演
(右上)絹押し絵体験：昨年の「2010 シルクフェア in おかや」の絹押し絵体験の作品
(左下)プチ機織り機体験：今年は右の建物 2 階で体験できます。1 階では本格的な高機での織体験も。
(右下)旧山一林組製糸事務所：現在は 1 階で「きぬのふるさと岡谷絹工房」が活動中

４月２９日は「シルクの日」

岡谷市は明治から昭和初期にかけ、日本の近代産業の礎を築いた製糸業において、その中核を担ってまいりました。その『シルク岡谷』の歴史を風化させることなく、広く継承していきたいと考え、毎年 4 月 29 日をシルクの日として「シルクフェア in おかや」を開催しております。

「シルクフェア in おかや」とは

今年で 15 回を数えるイベントで、製糸に関する歴史や絹を身近に感じることができます。各会場の入場料、体験料はこの日に限りすべて無料で、小さなお子様からご年配の方までお楽しみいただけます。各会場では、経済産業省より近代化産業遺産群に認定された歴史的な建造物や機械類など貴重な遺産の無料開放のほか、生きた蚕や珍しい桑の展示、ミサンガづくりや絹押し絵などの体験、絹製の衣料品、化粧品、インテリアなどの販売、写真や掛け軸等の資料を用いた解説も行われ、各会場で蚕から絹、製糸の歴史まで幅広く体感していただけます。

今年の目玉は４月オープンの「まゆちゃん工房」

平成２３年４月には旧山一林組製糸事務所２階に「まゆちゃん工房」がオープンします。これまで通り１階では「きぬのふるさと岡谷絹工房」による高機での絹織り、草木染めなど本格的な体験が楽しめます(通年営業)が、もっとお手軽に楽しみたいという方には２階に新しくできる「まゆちゃん工房」がおすすめです。シルクフェア当日は「まゆアート」「プチ機織り体験(左頁左下写真参照)」体験をお楽しみいただけます。もちろん両方体験することも可能です。

解説も聞ける無料循環バスで次の会場へ移動

近代化産業遺産群など歴史的な建造物も会場としているため、７つの会場は市内に点在しております。ご来場された皆様には多くの会場を回って、それぞれの会場をひとつずつじっくりと見学したり、さまざまな体験を楽しんでいただきたいと考え、イベント当日は無料の循環バスをご用意しております。20 分ごとに各会場を回りますので、時間にとらわれず自由に会場を巡ることができます。２本に１本の割合で次に向かう会場や車内から見える建造物などを説明するスタッフが乗っておりますので、次の会場へ移動しながら楽しむことができます。

問合せ先　　シルクフェア実行委員会事務局(岡谷市商業観光課内)
TEL　0266-23-4811(代表)
FAX　0266-23-6448
HP　http://www.city.okaya.lg.jp/
e-mail　shogyo@city.okaya.lg.jp

日本一のちりめん産地で開催される春の伝統イベント

第61回京丹後ちりめん祭

“きもの”を
もっと楽しもう！

～“きものパレード”や“きものファッションショー”など盛りだくさんに開催～

春のひと時、京丹後で はんなりと過ごしませんか！？

丹後で初めて「ちりめん」が織られたのは、今から約 300 年前と伝えられています。それ以来、丹後ちりめんの生産は市内一円に広がり、現在の基幹産業となりました。丹後は現在も国内の和装用白生地シェアの約６割を占める、国内最大の絹織物産地となっています。

ちりめん祭は、「丹後ちりめん」の一大生産地である旧網野町において、昭和 25 年の合併を記念して翌 26 年から始まり、今回で 61 回目を迎えます。織物産業と地域活力の振興・発展を目的に開催される、機音の中で歩んできたまちを象徴する、本市の春の代表的イベントです。

～ちりめん祭は「きものの日」、きものでおしゃれを～

■日　時　　平成23年4月16日(土) 10:00～16:00
〃　　17日(日) 10:00～15:30　※メインは 17 日

■場　　所　アミティ丹後周辺（京丹後市網野町網野）

■主な内容

16 日は、きものや帯などを産地ならではのお得な価格で購入できる展示即売会や織物などの展示会、17 日は、16 日の内容に加え、メインとなるきもの大パレード、ステージでは地元伝統芸能の披露やきものファッションショーが開催されるほか、お茶席、きものの無料レンタル･着付け、きものフォトサービスが用意されています。

その他にも、スタンプラリー抽選会、長さ 20mを超えるジャンボ巻き寿司づくり、ご当地グルメなどを堪能できる模擬店など、きものファンのみならず、どなたでも一日楽しんでいただける内容となっています。

～もっと“ＢＥＡＵＴＹ” もっと“ＦＡＳＨＩＯＮＡＢＬＥ”に～

今年も京丹後市商工会主催の“京丹後きもの祭”を同時開催

■場所　アミティ丹後内（京丹後市網野町網野）

■主な内容

［16 日／16：30～］

講演会

※講師：ＮＰＯ法人　京小町踊り子隊プロジェクト　代表理事　岩崎裕美さん

［17 日／10：00～15：30］

昼食会、京小町踊り子隊の舞台、スタンプラリー抽選会など

※17 日については、事前のお申込みが必要です。

【申込み・お問い合わせ先】京丹後市商工会（℡：0772-62-0342）

【お問い合わせ先】　京丹後市商工観光部商工振興課　℡：0772-69-0440

平成23年11月中旬まで

ジャパンブルー

京の水藍と阿波の藍

200年前の型紙を100枚展示

ジャパンブルーという呼び名は、明治期に来日した英国人達が巷にあふれる藍の色に目をひかれ、呼び賞賛したのが始まりです。

古来、藍の色は、日本人の暮らしの中で、濃淡さまざまな色合いに表情を変え多用されてきました。中でも型染めは、花・雲・鳥・道など自然等のモチーフが、精巧な技術による型紙で情感豊かな文様に表され、藍染めを経て鮮明に写し出されています。

今回、野村町中通川三瀬通忠氏より寄託の型紙800枚の内100枚と型染めの裂(布)120枚を合わせて展示しています。さらに、かつて京都の水田で栽培され、都の絹を美しい水色に染めた水藍を、阿波の藍との鮮やかな対比で紹介しています。

藍染めを体験できます

ろうけつ染・草木染・機織の体験できます。
お手持ちの反物を草木染めで染めてみませんか
3,000円でショール(1m50cm)自分で織れます

要予約

西予市野村シルク博物館

愛媛県西予市野村町野村8号177-1 〒797-1212
TEL・FAX 0894(72)3710

<開館時間>AM9：00～PM5：00
<休 館 日>毎週月曜日(月曜日が祝祭日のときは、その翌日)

本場大島紬フェスティバル開催

本場大島紬織物協同組合が実施している本場大島紬フェスティバに対して鹿児島市は支援を行っております。

低迷する大島紬業界の活性化を図るために、フェスティバルは開催されております。その内容としては、鹿児島をはじめ首都圏の百貨店における新作大島紬の展示や新作コンテスト、機織等の実演などとなっています。

２０１１本場大島紬クィーン決定

地元鹿児島においては、県内外で大島紬の PR 活動をする大島紬クィーンのコンテストが２月２６日に開催されました。コンテストの審査員として紬大使である宮崎緑さんも参加され、会場には多くの方々が訪れました。

新クィーンへ襷を渡す際に現クィーンが涙する場面も見受けられました。

今年は九州新幹線全線開業の年、クィーンの活躍が期待されます。

洋装ファッションショー開催

また当日地元女子学生による自作自演の大島紬洋装ファッションショーが開催されました。若い感性によるデザイン性の高いワンピースやドレスが発表されました。今までにない紬の新たな魅力を多くの人々に情報発信する絶好の機会となりました。

問い合わせ先　鹿児島市企業振興課　　℡：０９９－２１６－１３２３

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成団体等一覧

（平成 23 年 3 月 31 日現在）

■会員（２５団体）

1	山形県鶴岡市	10	新潟県小千谷市	19	京都府宮津市
2	山形県長井市	11	新潟県南魚沼市	20	京都府京丹後市
3	山形県白鷹町	12	石川県金沢市	21	京都府与謝野町
4	福島県川俣町	13	山梨県富士吉田市	22	愛媛県西予市
5	茨城県結城市	14	山梨県西桂町	23	鹿児島県鹿児島市
6	栃木県足利市	15	長野県岡谷市	24	鹿児島県奄美市
7	群馬県富岡市	16	長野県駒ヶ根市	25	鹿児島県龍郷町
8	東京都新宿区	17	滋賀県長浜市		
9	新潟県十日町市	18	京都府京都市		

◇役員

会　長　京都府京丹後市（市長　中山　泰）

副会長　山形県鶴岡市・福島県川俣町・群馬県富岡市・石川県金沢市・長野県岡谷市・京都府与謝野町・愛媛県西予市

監　事　山梨県西桂町・京都府宮津市

■特別会員［オブザーバー］（５名）

農林水産省生産局生産流通振興課特産農産物対策室長
経済産業省製造産業局繊維課長
経済産業省製造産業局伝統的工芸品産業室長
経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長
経済産業省中小企業庁経営支援部新事業促進課長

■顧問（９名）

◎ファッションジャーナリスト

清水　早苗氏　　ジャーナリスト／クリエイティブ・ディレクター

◎クリエーションコーディネーター

松田　正夫氏　　（独）中小企業基盤整備機構近畿支部近畿支援事務局プロジェクトマネージャー

岡田　茂樹氏　　日本ファッションプロダクト協会　代表理事

◎テキスタイルデザイナー

須藤　玲子氏　　株式会社布取締役

酒井　美和子氏　　（有）GBカンパニー代表取締役

福井　健二氏　　K.FUKUI PERSONAL OFFICE&EA 主宰

永森　達昌氏　　オフィス・ナガモリ代表

◎和装

早坂　伊織氏　　着物伝承家

笹島　寿美氏　　着装コーディネーター・帯研究家

■協賛団体（２４団体）

◎蚕糸団体

（財）大日本蚕糸会・（社）日本生糸問屋協会・中央蚕糸協会・碓氷製糸農業協同組合

◎産地織物組合

鶴岡織物工業協同組合・福島県絹人繊織物構造改善工業組合・小千谷織物同業協同組合・山梨県絹人繊織物工業組合・滋賀県絹人繊織物工業組合・丹後織物工業組合・本場大島紬織物協同組合・本場奄美大島紬協同組合

◎絹業団体

（社）日本絹業協会・全国染色協同組合連合会・全国染織連合会・京友禅協同組合連合会・京都工芸染匠協同組合・日本織物中央卸商業組合連合会・(社)全日本きもの振興会・（社）全日本きものコンサルタント協会・(財)シルクセンター国際貿易観光会館（シルク博物館）・東京ネクタイ協同組合・日本繊維輸入組合・新宿区染色協議会

こころを整える～文化発心

第26回国民文化祭・京都2011 平成23年10月29日㈯－11月6日㈰

PR隊長　まゆまろ

編集／発行　　シルクのまちづくり市区町村協議会

発 行 年 月　　平成２３年６月

【この情報誌に関するお問い合わせ先】
シルクのまちづくり市区町村協議会事務局
（京丹後市商工観光部商工振興課）
〒629-3101　京都府京丹後市網野町網野 353 番地の 1
TEL：0772-69-0440／FAX：0772-72-2030
メール：info@silkroad-japan.org
ホームページ：http://www.city.kyotango.kyoto.jp/silk/